



＼ 垂水戦跡調査隊 ／

垂水市 × 垂水高等学校 × 鹿児島大学
2025 年度連携事業成果報告パンフレット

戦争が終わって 80 年経ちました

失われていく戦争の「記憶」の記録・継承・活用のために
モノや場所を介してヒトへつなぐ機会の重要性が高まっています

戦争を体験していない私たちにはできることは何でしょうか
永遠の平和を願うのなら、過去を直視する勇気が必要です
垂水で起きた戦争を調べ、学び、伝えるプロジェクトの始まりです

垂水と昭和の戦争

ここでは、日中戦争の開始(1937年)から終戦(1945年)に至る戦争の歴史を、垂水の人々の戦争の記憶と重ねながら記していく。参照するのは、垂水市史料編纂委員会編『垂水市史料集(十三) 戦争体験記』(垂水市教育委員会、1995年、以下『体験記』)である。

昭和12(1937)年7月、北京近郊の盧溝橋事件を端緒として、日中両軍の衝突が始まった。政府は当初、不拡大方針を掲げたが、軍に引きずられて戦火は中国全土へと拡大した。軍の当初の予想は外れ、戦争は終わりの見えない泥沼の様相を呈していく。

国内では、「赤紙」と呼ばれる臨時召集令状による補充兵の動員も開始され、多くの男性が戦地に向うことになる。鹿児島市の第45連隊、都城市の第23連隊なども中国戦線に投入され、そこで垂水の人々は戦場を経験することになる。『体験記』には、出征の際の地元の様子、現地に到着して初めて目にした中国の景色、そして行軍と戦闘の様子が、多くの人々の死とともに記録されている。

ある警備地で周辺の討伐中二人で同時に嶺線に頭を出した途端パーンという音と同時に中井伍長が倒れた。鉄帽の真中を小銃弾が貫いて頭部貫通の即死だった(20頁)。

一ヶ月位たちました。先ず銃剣で人間を突き刺すのを、中国兵を実際に一人一人体験させられました。これが戦争だと班長は話していました(52頁)。

昭和16(1941)年12月8日、日本は英米をはじめとする連合国に宣戦布告し、戦争はさらに拡大していく。開戦から半年間は快進撃を見せた日本軍だったが、昭和17(1942)年6月のミッドウェー海戦を境に戦況は暗転する。こうしたなかで、中国大陸に派遣されていた第45連隊や第23連隊も、中国戦線から南方戦線へと転出する。その行き先が南太平洋、ソロモン諸島のブーゲンビル島だった。ブーゲンビル島の戦いは、この時期の日本軍の悲劇を象徴している。

昭和18(1943)年11月、連合軍が島に上陸、日本軍守備隊は防衛戦を展開したが、圧倒的な兵力を誇る連合軍によって島の制海権・制空権を奪われた結果、補給が途絶した。兵士たちは敵の攻撃だけでなく、飢餓とマラリア、アメーバ赤痢といった病魔に襲われた。食糧、医薬品が尽き絶望的な戦場となったブーゲンビル島は、「墓島」と呼ばれた。『体験記』には、ブーゲンビル島の様子が克明に記録されている。

医療品もなく、マラリヤ、熱帯性カイヨウ、栄養失調と病人は多くなり、毎日死亡者が続出した。ある戦友は白い米の飯と魚を腹一杯食いたいと云って息を引き取った。…動物性蛋白質を取る為に、蛇、とかげ、カエル、ネズミ等何でも食べた。生きるためには何でも食べられるものである。この頃が一番死亡者が多く、今日は何人かと墓掘りに苦労した。次はおれか、お前かと話ながら掘ったものだった(17-18頁)。

ブーゲンビル島での死者は2～3万人に及ぶが、その大半は病死・餓死であり、無謀な作戦によっていかに多くの国民の命が失われたかを物語っている。垂水市民のブーゲンビル島での戦死者は38名にのぼる。

昭和19(1944)年、サイパンが陥落したことで、日本本土は米軍の大型爆撃機B29の射程内に入った。昭和20(1945)年3月の東京大空襲では一晩で10万人以上の命が失われ、地方都市も次々と焦土と化した。垂水も例外ではなく、3月と8月にアメリカ軍機による激しい空襲を受け、市民に大きな犠牲が出た。その衝撃的な体験も『体験記』に記されている。

突然私たちの壕の前に爆弾が落ち破裂して大音響と共に火を吐き始め隣の壕の中が燃え始めました。私達の防空壕は隣の壕とは直径五十糎位の穴が通じるようになっていました。その穴から真赤な炎がゴオツゴオツと音をたててはいつてきたかと思ったら、こんどは隣の壕にいた娘さん(十九歳位)が火だるまに燃えながら仰向けに落ちてきました。私は子供と女手ではどうする事も出来ず子ども達を布で包んで山奥の他所の防空壕へと避難しました。時間がどの位過ぎたのかわかりませんが空襲が止んでからもとの避難していた場所に帰ってみると隣の壕で、十人、その隣の壕で七人全員焼死しておりました。私達も最後までそのまま壕の中にいたらどうなっていたことか。…焼死された娘さん達は当日も早々と避難してきて壕の外で親子四人で仲睦ましく髪の毛のシラ

ミ取りなどして時を過ごされておられた姿が今でも目にやきついて浮かんできます(173-174頁)。

垂水が狙われたのは、軍事施設があったためと考えられる。垂水には浜平の垂水海軍航空隊、牛根麓の桜島海軍航空隊の2つの部隊・基地があった。これらはいずれも戦争末期に配備が開始されたためほとんど記録は残っていないが、基地と関わった垂水の人々の記録を通して、その姿を浮き彫りにすることができる。4月には沖縄に米軍が上陸し、凄惨な地上戦が展開されたが、桜島海軍航空隊は沖縄に向けて偵察任務や特攻のため出撃している。

昭和20(1945)年7月、連合国はポツダム宣言を発表し、日本の無条件降伏を求めた。日本政府は当初これを黙殺したが、8月6日の広島、9日の長崎への原子爆弾の投下、そしてソ連の対日参戦が決定打となった。8月14日、昭和天皇の聖断によりポツダム宣言受諾が決定され、翌8月15日、玉音放送を通じて敗戦が国民に告げられた。『体験記』にも、玉音放送を聞いた市民の記録が数多く見られる。勝利を信じて戦争に協力してきた人々の怒りや悲しみ、そしてようやく戦争が終わったことに対する安堵感が記されている。

「垂水の戦争の記録」とは、垂水という地域での戦争の記憶にとどまらない。当時垂水の人々が、故郷で、あるいは中国やブーゲンビル、東南アジアの戦場で、あるいは終戦直後のシベリアや朝鮮半島でどのような体験をしてきたのか、それらもまた、垂水の戦争の記憶にほかならない。

垂水の戦争遺跡

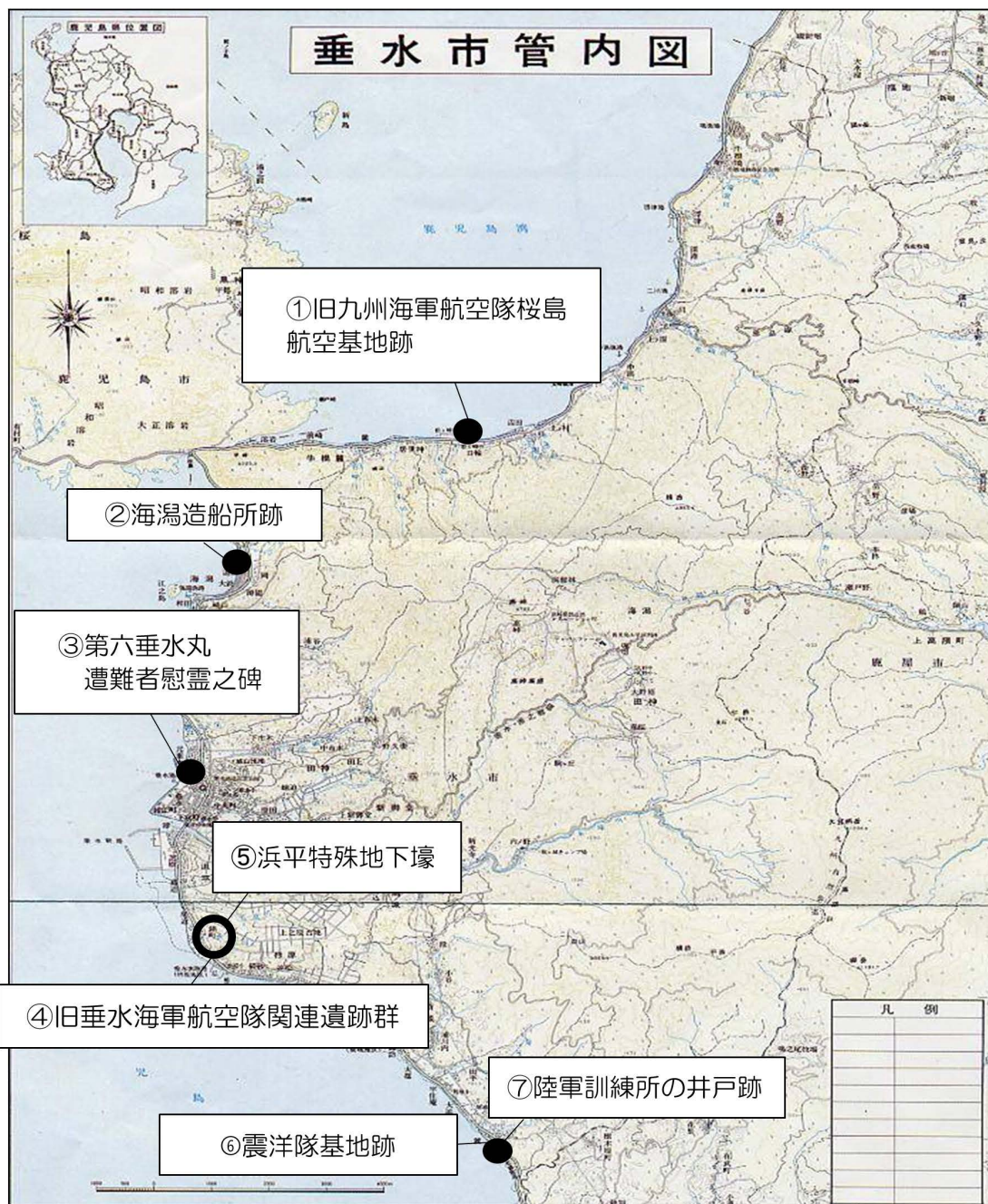


図1 垂水市域の主要な戦争遺跡等

近代遺跡のうち、特に太平洋戦争期の遺跡を指すものとして、「戦争遺跡」という言葉が使われます。時に語りや文字よりも色濃く歴史を残す戦争遺跡は、戦後80年を迎えた現代において、その役割が増していると言えます。

垂水市域においても、複数の戦争遺跡が所在しています(図1)。また、未だ把握できていない戦争遺跡も多く

残されており、新発見も続いています。例えば、浜平から柊原一帯に広がる旧垂水海軍航空隊基地の範囲においては、測量調査や聞き取り調査等により、魚雷整備施設などが今も残っていることが明らかになりました。

近年の調査の中で、とりわけ顕著な成果であったのは、「浜平地下壕」に関する測量成果です。浜平地下壕は、

道の駅たるみずはまびらの目の前、赤迫川から北へ延びるシラス崖の中に築造された、魚雷整備施設です。幅4m、高さ3mほどの巨大なアーチ状の壕が縦横に規則正しく結ばれ、一部には壕を支えた支保工の跡や、コンクリートが張られた床面、発電機が設置されていたとみられる基礎部や発電用の燃料貯蔵槽（図2）が残存しています。



図2 燃料貯蔵槽

シラス台地の中を規格的に掘削してつくられたためか、全体の構造が安定しており、掘削時のノミ痕や電線がめぐっていた痕跡等も観察できます（図3）。中でも特筆すべきは約1.75kmという縦横の総延長で、ひとまとまりの地下壕としては全国でも有数、九州では最大級という規模を誇ります（図4）。



図3 壕内の様子

遺物としては、電気を配線していた証拠である「碍子（がいし）」や、電線を支えていたと思われる大型の釘、また当時は貴重だったコンクリートの塊などが見つかっています。

戦争遺跡から事実を語るうえでは、文字資料等から歴史的背景を紐解くとともに、地質・地形学的視点からのアプローチも重要となります。加えて、物や場所に残された物的な痕跡を探ることで、記述されないモノゴトまで詳細に復元できる可能性があります。そして痕跡を探る術は、日進月歩で更新されています。未来で更なる事実を語ってくれる可能性があるからこそ、現在の技術で記録されたデータだけではなく、遺跡自体を保存し、後世に伝えていかなければならないのです。

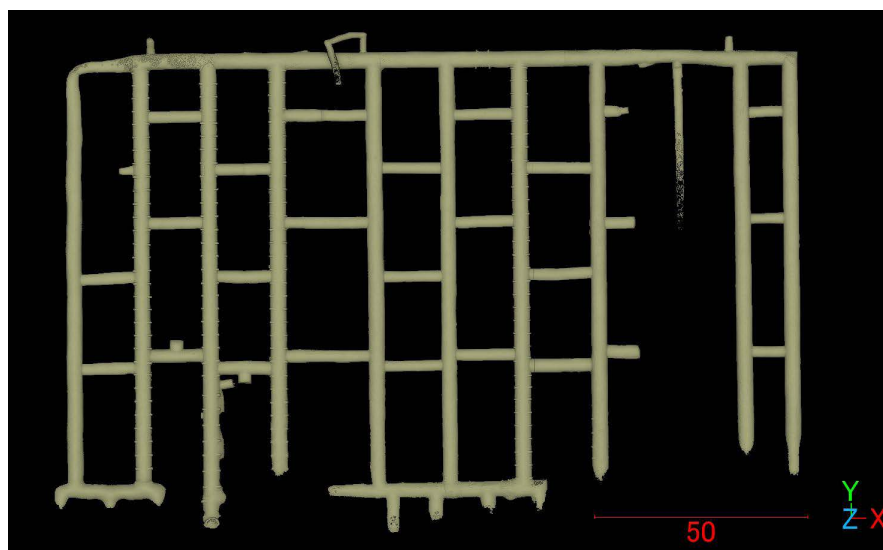


図4 浜平地下壕全体図

担当：高嶺光佑（垂水市教育委員会社会教育課文化スポーツ係主事）

垂水史談会の活動

垂水史談会は垂水麓の人々を中心に昭和2（1927）年に発足し、現会員は37名（2025年4月1日時点）。年一回の総会と研修、毎月一回のまち歩きと史跡めぐり等を実施しています。活動状況はA4で「垂水史談会報」（以下、会報）を作成して市内の各施設に置いて広報を行っています。また、昭和19（1944）年2月6日に起こった第六垂水丸の沈没事故や翌20（1945）年8月5日の垂水大空襲を伝えようと毎年、図書館等で写真や資料展示、証言を聴く活動をしています。

会報の発行

会報は会員同士の交歓と市民との連携を目指し、2か月に一回程度の不定期発行でしたが、2025年度から毎月発行しています。内容は活動報告や会員による「研究ノート」、垂水の文化財や史跡、民俗の紹介などで、特に写真を活用して分かりやすく、会員の趣味（「蝶」の話等）等も取り入れて読みやすい紙面づくりに努めています。



市内の学校との連携

垂水の歴史・文化が会員の研修や研究だけに留まることなく、次世代につなぐことは大切なことです。垂水小学校3年生による学校付近の史跡めぐり、垂水中央中学校3年生の牛根から新城に至る史跡めぐり、垂水高等学校の生徒全員の日かけて歩く「史蹟めぐり」は約10年の実績があり、垂水史談会会員はコースの各地点に立って生徒たちに説明します。各学校の理解と協力により毎年開催されており、垂水史談会の重要な活動の一つです。



史跡・文化財等の清掃活動

国史跡に指定された垂水島津家墓地や殿様水等の周辺は、会員によって毎年お盆前に早朝一時間程度草刈り等のボランティア活動をしています。ただ、会員の高齢化もあり思うに任せないのが心配です。



鹿児島大学との連携

浜平の垂水海軍航空隊の特殊地下壕や新城の震洋基地、海潟の垂水造船所跡など戦跡の存在は把握していましたが、鹿児島大学との連携事業により専門的な知見を交えた協力と鹿児島大学生の積極的な行動力により、垂水史談会の活動内容が深く前進しました。今後も連携事業を続けていきたいと考えています。



垂水の歴史・文化を未来につなぐために活動を続けます！

担当：瀬角龍平（垂水史談会会長）

垂水高等学校の探究活動

授業「総合的な探究の時間（総探）」で地域の課題と解決方法を調査。
戦後 80 年にあたる 2025 年度は垂水の戦争を中心に学習しました。

総探をはじめます！（4～6月）

- ・ 講義やグループワークで総探の進めかたを学習
- ・ 出前授業で垂水市の戦争を学習



出前授業（垂水市教育委員会）

垂水の戦争を知る！（7～9月）

- ・ 戦争についての事前学習
- ・ 垂水市・鹿児島大学との合同ワークショップ

＼Pick up／



合同ワークショップ

垂水の文化財を知る！（11月）

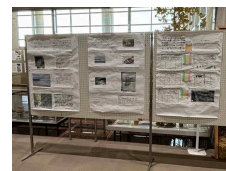
- ・ 鹿児島県文化財セミナー（垂水麓の街歩き）
- ・ 史蹟巡り（学校行事）



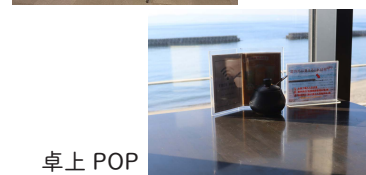
史蹟巡り

成果を広く伝える！（10～2月）

- ・ 文化祭のポスターで成果発信
- ・ 鹿児島県高校生探究コンテストでポスター発表
- ・ 道の駅の飲食店に設置する POP 作成・贈呈
- ・ 令和 7 年度包括的文化財調査成果発表会



文化祭の
ポスター



卓上 POP

垂高生の
挑戦

戦争遺跡を三次元計測しました！

9月の合同ワークショップでは、考古学で活用される三次元計測を高校生が実践。iPadと3DスキャンアプリScaniverseを用いて地下壕の3Dデータを作成。戦争遺跡の現状を記録することに成功！



大学生に計測方法を教わる高校生



高校生が作成した地下壕の3Dデータ

＼Pick up／

合同ワークショップを開催しました！

垂水市の戦争の記憶や記録を未来につなぐ方法を一緒に考えるために、垂水市×垂水高等学校×鹿児島大学合同ワークショップを開催。身近なところに残る戦争遺跡の調査を踏まえて、高大生が意見交換しました。

道の駅たるみずはまびら周辺の戦争遺跡を踏査する！



魚雷航跡監視台場跡の解説



垂水海軍航空隊之碑の解説



赤迫川地下壕群の三次元計測

合同ワークショップで議論する！

3グループに分かれて議論し、全体で意見を共有しました。

議題①戦争についてどう思うか。

- ②未来にむけて、戦争の何を、どのように、なぜ残すか。
- ③垂水市の戦争遺跡や資料の活用について考える。



Aグループ

- ①戦争は多くの犠牲をうむ。関係ない人が巻き込まれ、多数の死者が出た。立場の弱い人が一番被害を受けやすい。少数・個人の利益に利用される。
- ②戦争関係史料、体験、戦争遺跡を残す。図書館等で戦争の話をする。皆に公開する。戦争の被害の大きさ、戦争に行った人たちの思いが皆の記憶に残るようにする。実際に見ることでイメージできる。二度と戦争が起こらないようにするため。
- ③史跡巡り、新聞作成、若い世代への継承（メディア・映画・ゲームの活用）。

Bグループ

- ①殺し合い、奪い合う戦争は大切なもの（人命、インフラ、文化財等）を壊す。一度始めると制御が難しく、完全に無くすことは難しい。
- ②偏った意見ではなく多様な立場から考えることができるように、実際に起こった出来事の記録、体験談、証言、資料、建造物、データを残す。遺跡やモノは壊れてしまうので保存が必要。惨劇を繰り返させないために未来の人に伝える。
- ③戦争遺跡の保全、環境整備、マップ、3D・AR・VRの活用、目録公開、ヒトの活用。

Cグループ

- ①日常が奪われる。人間が存在する限りなくなならない。繰り返してはいけない。
- ②3D計測で図面作成、模型やARの活用、ジオラマの作成、展示。モノ・文献・記憶・遺跡のすべてを残すには資料館が必要。事実を残すことで、研究や平和学習を推進する。
- ③資料館を中心に屋外でのアクティビティを実施（市内観光・周遊の充実、ウォーキングコース、サイクリングコース、ポイント、スタンプ等）。

合同ワークショップの議論を経て、どれほどの人が垂水市の戦争について知っているのか疑問をもちました。10/18の文化祭来場者に出来事を説明し、垂水市の戦争遺跡の認知度のアンケート調査を実施しました。

解説文

「垂水大空襲」

今から84年前、昭和16（1941）年12月8日未明、日本軍がアメリカの真珠湾を攻撃したことによって太平洋戦争が始まった。戦況が変わるにつれ、出兵・勤労奉仕が行われたほか、垂水海軍航空隊の開設、九州海軍航空隊桜島航空基地の建設など、垂水市は戦争の影響を受けるようになった。昭和20（1945）年になると度重なる空襲を受け、同年8月5日には「垂水大空襲」が起こった。

Q. 垂水でかつて多くの人が犠牲になる垂水大空襲があったことを知っていますか？

	知っている	知らない	総計
市内	11	6	17
市外	5	10	15

「垂水海軍航空隊」

垂水海軍航空隊は昭和19（1944）年2月に開隊し、約1年半の短い期間活動した。現在の水産試験場周辺から終原小学校西側までの海岸沿いに位置していたが、昭和20年3月の空襲以降、赤迫川周辺に多くの防空壕が作られ、部隊の機能はそこへ移された。

Q. 垂水に「垂水航空隊」があったことを知っていますか？

	知っている	知らない	総計
市内	4	12	16
市外	2	12	14

浜平の「魚雷航跡監視台場跡」

昭和19～20年まで、現在の道の駅たるみずはまびら近くに垂水海軍航空隊が設置された。兵舎、本部指令室、兵器製作所、練兵場、西ヶ崎・高尾・権現山に20mm機関砲を有する機銃座、コンクリート製のトーチカ（小型の防衛陣地）等が設置され、沖には5か所に魚雷航跡監視の台場も設置された。これは、魚雷の訓練で、まっすぐ進んでいるか等をチェックしていた場所で、昔は橋がかかっていたらしい。今は、台場の一部のみが海に残されているのが道の駅から見える。

Q. 道の駅たるみずはまびらから見える岩場が「魚雷発射のための監視台」の跡だと知っていましたか？

	知っている	知らない	総計
市内	2	14	16
市外	1	13	14

結果：垂水大空襲は垂水市在住者の認知度は高いですが、その他はほとんどの人に知られていないことが分かりました。

要因：遺跡が人の目につかないところにある。
戦争遺跡等の現状維持が環境面で難しい。

対策：現実で残すことも大切ですが、永続的に保存できるように、3D計測による模型作成や、インターネットやバーチャル空間を通して多くの人に知ってもらうことが大切です。
継承するための具体的方法を引き続き考えていきます。

垂水の戦跡調査を通して高校生が考えたこと

私は垂水市に住んでいますが、垂水で戦争があったことは知りませんでした。今回鹿大生と戦争の遺産を未来に残すために戦争遺跡を見に行きました。山で初めて防空壕を見ました。防空壕の中は砂で埋まっており、一人ずつしか入れない大きさで、案内の方のお話ではそれがずっと奥まで掘られているとのことでした。道の駅たるみずはまびらからは魚雷航跡監視の台場の一部を見ることができ、潮が引いていたら現場の近くに行けることが分かったので今度友達と行ってみようと思います。今回垂水の戦争遺跡を見てそれを残すために自分ができることは、鹿大生と行った戦争遺跡のことを家族や友達、地域の人に話し、その遺跡と一緒に見る機会を作り色々な人に見せ、戦争のことを知ってもらうことだと考えました。

私が「総合的な探究の時間」を通して垂水市の戦争について学び分かったことは時間がたつにつれて、人々に忘れられてしまうのと同時に、戦争の凄惨さを物語っている遺跡も少しずつ壊れていってしまうことです。現地で調査をしたとき、防空壕が沢山ありましたが、土砂などが入り込んで奥には入れなくなっていたり、道の駅たるみずはまびらから見える魚雷航跡監視台場跡も波に打たれて、目には見えませんが年を重ねていくにつれて壊れていっているようでした。さらにアンケート結果によれば、魚雷航跡監視台場跡などがあったことを知らない人も多く、知らない人にも分かり易く伝えるために、3D計測で作った模型や、インターネットなどを使いつつ、データとして残していくのが大切だと思いました。

僕は垂水市に戦争遺跡があるということを初めて知りました。アンケート調査で垂水市の戦争遺跡を地元の人でもあまり知らない人が多いことが分かりました。実際に現地に調査に行ったとき遺跡が意外と人目のつかないところにあったり環境の影響で見れないことなどに気がつき、それが原因で知られていないと感じました。そこで、鹿大生とどのようにすれば解決できるか考え、クイズ式ポップを作成し、飲食店などに設置して、みんなに知ってもらおうというアイデアを考えました。これからはいろんな人々に知ってもらえるように研究を続けていこうと思います。

鹿児島県の垂水市の戦争遺跡を1年間調べる中で、戦争が身近な出来事であり、戦争に関する遺跡から当時の人々の苦しさ伝わってきて、平和は当たり前ではないと感じました。地域の歴史を知ることができたので、今後の「総合的な探究の時間」の活動に活かせるように学んだことを大切にしたいと思います。

私は垂水市の戦争について学ぶ前は、こんなことがあったのか、で終わっていましたが、学んでから、新しく知ることがたくさんあり、犠牲者の数も多く二度と起こってはいけないことだと思いました。現地に行ってみて、垂水にこんなところがあるなんて知らなかったと思うところがたくさんありました。鹿大生と遺跡調査をしてみて、鹿大生は意見をまとめるのが上手で、グループワークをしているときは色々な案が出てきて、凄いなと思うところがたくさんありました。学ぶことで、自分にも、総探の時間を通してパンフレットなどで身近な人から、垂水市外に住んでいる人々にまで、広めていくことができると自信をもてました。

僕がこの探究をはじめて一番最初に思ったことは、まずは、僕たちが、垂水の歴史について知ることだということです。現地に鹿大生と行ってみて、写真や話だけでは見えない部分まで見えてやっぱり見に行くことも大事なんだと思いました。このことを後世につないでいくには、現地の維持や知名度の問題など様々な課題が出てきたときに鹿大生の意見を聞くとやはりほかの視点からの解決策が出てきて自分では思いつかない発想を手に入れることができました。垂水だけに限らず、ロシアやウクライナなど今戦争をしている国のことを自分には関係ないで終わるのではなく、もっと知ろうとも思え、これから自分にできることをよく考えて生きていきたいと思いました。

僕がこの探究で思ったことは遺跡が残っている場所やその管理についてです。まず実際に遺跡へ自分の足で行ってみて最初に思ったことはあまりにも目立たなく一般人とかは絶対にここには来ないだろうという印象です。垂水には防空壕をはじめたくさんの遺跡があるがどれも目立たない場所や絶対に人が来ないであろう山奥などにあったり実際多くの人がある存在を知らないというのが現状です。これらの目立たない遺跡を多くの人たちに知ってもらうにはデジタル技術を活用し、インターネットやバーチャル空間で多くの人達に知ってもらうことが大切だと考えました。これからの時代はバーチャル空間などが良く使われる時代だと考えていて、その中で3DCGなどを使い遺跡を模して造れば多くの人達に知ってもらえると思います。

垂水の歴史の奥深さを知る
学びの多い1年でした！



戦争遺跡の地形・地質的特徴

垂水市周辺の戦争遺跡は海岸部を中心に多く点在しています。とくに、防空壕の目的で利用された地下壕などのトンネル状の戦争遺跡が多数みられます。ここでは、海岸部に点在するトンネル状の戦争遺跡の地形や地質的な特徴についてお話します。

あたりまえの話ですが、トンネルには出入口が必要です。垂水市周辺の戦争遺跡の特徴として、鹿児島湾の海岸線に続く急な崖に分布していることがあげられます。トンネル状の戦跡は自然にできたものではなく、人の手によって掘られたものです。すなわち、やわらかく、人力でも掘り易い土であったことを示しています。このやわらかい土こそ、鹿児島県の地形や地質を特徴づけるシラス台地なのです。

シラス台地は、約3万年前に始良カルデラが巨大噴火をした際に噴出した火砕流堆積物から作られています。始良カルデラは現在の桜島を含む、鹿児島湾北部になります(図1)。この時の巨大噴火は遠く青森県まで火山灰を降らせ、鹿児島県周辺では厚さ80～100m近くの火砕流堆積物によって埋め尽くしたのです。また、この始良カ



図1 始良カルデラの位置

ルデラから噴出した火砕流堆積物は低温であったため、溶岩のように冷え固まらずに、シラスと呼ばれるサラサラとした砂となって堆積しました。このように崩れやすく、水はけの良いシラスがトンネルに必要な急な崖を鹿児島湾の海岸線沿いに作り出し、人力で掘り易いやわらかい土を提供しました。

さて、具体例として、新城のまさかり海岸の震洋壕を見てみましょう(図2)。ここは鹿児島湾を見渡せる海岸線に位置しており、背後にはシラス台地の急な崖があります。その急な崖を出入口として、兵器を整備・格納する施設として利用していたようです。

この場所の特徴は、他の戦争遺跡と同様に、人の手で掘りやすいシラスであるだけでなく、その下にカチコチに硬く、なかなか水を通さない岩があります。すなわち、この場所は水を通すシラスと、水を通さない溶結凝灰岩と呼ばれる固い岩の境界にあたり、現在も絶え間なく地下水が湧き出しています。すなわち、この部分はシラスがとも崩れやすい場所で、もともと天然のトンネルができていた可能性があり、さらに人手を加えて軍事施設にしたと考えられます。



図2 非溶結凝灰岩のシラスと溶結凝灰岩

担当：吉田明弘（鹿児島大学法文学部人文学科准教授 [自然地理学]）

浜平地下壕と赤迫川地下壕群

本土への本格的な空襲が予見される中、各地の海軍航空隊は基地施設の地下移行に着手します。垂水海軍航空隊も例外ではなく、隊員が退避するための防空壕をはじめ、魚雷などの爆発物を格納あるいは整備調整する壕、物資を格納する倉庫壕、さらには発電所や病院としての用途を持つ地下壕なども設けられたようです。垂水海軍航空隊が所在していた浜平・柘原地区には現在もこれらに該当すると考えられる壕が残っています。

浜平地下壕

浜平地区の高尾崖に掘削された地下壕で、総延長で約 1.75km が現存します。直線の坑道が 11 本あり、このうち 10 本の長さは各 100m です。これらの坑道は最深部で横坑によってつながられています。さらに各坑道は複数の横坑でつなぐられ、平面図にすると「はしご」のような形で規格性をもって掘削されていることが判ります。内部には貯水槽のような構造も確認でき、単に民間人が避難するために作られた防空壕とは異なる軍の関与が想定される大規模な壕であったことが判ります。

さて、浜平地下壕の用途ですが、現在のところ魚雷整備に関わる施設として使用したと考えられています。敗戦直後の昭和 20 (1945) 年 8 月 31 日に、残務処理のため垂水航空隊でまとめられた『引渡目録(兵器)』¹には、垂水海軍航空隊の施設の概略図が記載されています。詳しく見ると、浜平地区の高尾崖付近には“UNDERGROUND ESTABLISHMENTS(Caves)”、すなわち地下施設(洞窟)

があり、それぞれ“Torpedo Servicing Training Station”(魚雷整備訓練所)、“Training Equipment Warehouse”(訓練機材倉庫)として用いられていたことが確認できます。

赤迫川地下壕群

浜平地下壕に隣接する赤迫川周辺にも多くの壕が残されています(図)。これらの壕は浜平地下壕とは異なり小振りなものが多く、構造もコの字型でやや簡素です。『引渡目録(兵器)』は、赤迫川下流の壕を“Warehouse”(倉庫)、上流の壕を“Air Raid Shelters for enlisted men”(下士官用防空壕)としており、航空隊に関わる物資や人員を空襲から防護するために運用された壕であると想定できます。

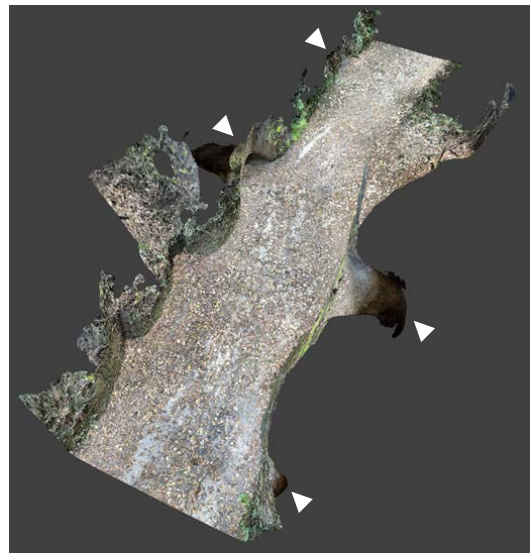


図 赤迫川地下壕群の配置
地下壕(三角印)は砂で埋まり、天井部のみ確認可能

このように、浜平地区と赤迫川に残る一連の壕は、アジア・太平洋戦争末期の垂水海軍航空隊の状況を示す大変貴重な遺跡です。

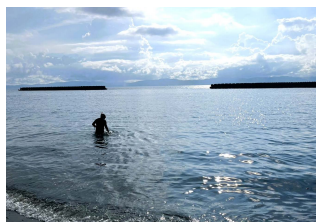
註1「兵器目録 垂水航空隊」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C08011375900、昭和 20 年 8 月 31 日。



魚雷航跡監視台場跡

道の駅たるみずはまびら前の海には、不思議な岩が存在します。満潮時には海面下に没し、干潮時に頂部が露出するこの岩は、太平洋戦争期に設置された魚雷航跡監視台場の跡です。

昭和19（1944）年に設立された垂水海軍航空隊では、91式航空魚雷の整備教育を行いました。魚雷訓練時に航跡を観測するために、沖に5か所の魚雷航跡監視の台場が設置されました。現在残っているのは1か所で、上部構造物は失われ、基礎の岩体のみが水中にあります。台場跡の周辺には遠浅の砂浜が続き、地元住民によると最干潮時には海岸から歩いていくことができるそうです。



水中撮影に向かう筆者



台場跡の水中写真

シュノーケリングによる水中観察および写真・動画撮影の成果を報告します。台場跡は、満潮時の水際から約50mの沖合に位置し、水深約3～4mの浅い海域にあります。台場跡の平面形は三角形状を呈し、大小様々な石がマウンド状に積み重なっています。また、上部には構造物の残骸と考えられるコンクリート塊がまばらに残っています。干潮時に海面上に現れるのは頂部の10m程度のみですが、水中観察から東西方向約30mの大規模な構造物であることを確認しました。

岩体表面にはウニ類や貝類などの底生生物が高密度で付着しており、岩の隙間や周辺には多数の小魚が群れていました。また、それらを捕食対象とする中型から大型の魚類も確認され、食物連鎖がこの限られた空間の中で成立している様子が見えます。

周囲の砂地には身を隠すことのできるものがほとんど存在しないため、台場跡は生物にとって重要な隠れ家であり、餌場ともなっています。かつては戦争という目的のもとに築かれた施設が、時を経て自然に取り込まれ、現在では沿岸生態系を支える拠点となっています。この台場跡は歴史的遺構としての価値とともに、海中のオアシスとしての役割を果たしています。

垂水と震洋：新城の震洋壕

太平洋戦争末期、米軍の本土上陸が現実味を帯び始める中、垂水に震洋特別攻撃隊（震洋隊）がやってきました。震洋は敵艦船への自爆攻撃を想定した兵器です。震洋を隠したり、空襲から守ったりするために格納壕が掘られることがほとんどでした。

垂水には複数の震洋隊の基地があったとされています。震洋隊に関するものと現在判明しているのは、新城の震洋壕と赤迫川地下壕群¹だけです。ここでは新城の震洋壕を中心に垂水と震洋隊の関わりを見ていきます。

新城と2つの震洋隊

新城基地には2つの震洋隊が関わりました。1945年4月、新城に到着した第112震洋隊（木野隊）は崖下に連結壕を構築し震洋を格納しましたが、5月の火災で全艇が誘爆し、大隅の間泊への移動を余儀なくされました。その後、6月末に佐世保を出た第47震洋隊（葛原隊）が、故障や悪天候に見舞われながらも8月に全隊員が到着し、葛原隊の火災跡が残る既存の格納壕を引き継ぎました（図1）。



図1 1945年当時の震洋格納壕前の様子（震洋会1990より引用）
※表紙写真と見比べてください

新城に残る震洋格納壕（図2）
新城の震洋壕は、上段と、2本の水路が通る下段の階層構造になっており、入口は高さ6m、幅5.8m、奥行11mです。九州や奄美、沖縄の震洋壕は、震洋がちょうど収まるサイズ（高さ2～3m、幅3～4m）で、壕内は平らで階層もないことを踏まえると、新城の壕は極めて異例なものです。

しかし、元木野隊部隊員の証言では壕の奥行は20mとされており、本当に震洋を格納するための壕であるかは断定できない状況にあります。震洋の壕なのか、他の用途で使われた壕なのか。新たな文献記録や証言の出現を願います。

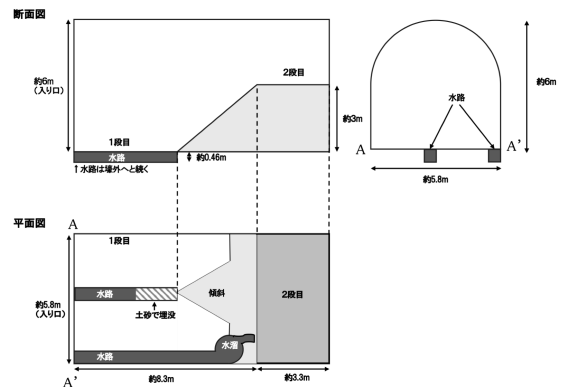


図2 新城の震洋壕の略測図

註1 赤迫川地下壕群は航空隊のものだが、第61震洋隊は航空隊横穴壕をそのまま震洋格納壕として使用した。

[参考文献]

震洋会1990『人間兵器 震洋特別攻撃隊』国書刊行会



調査風景

担当：山元創平（鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース4年）

戦争とともにある日常

県立第一鹿児島中学校に入ると、学校生活の中に軍事訓練が組み込まれるようになりました。配属将校の指導のもと、銃の扱い方を教えられましたが、使ったのは日露戦争時代の古い銃や木銃で、主に突きの動作を繰り返す訓練でした。小学校の5、6年生でも整列や号令の教練があったので、「何のために中学に入ったのか」ということもありました。気を引き締める面もありましたが、心のどこかで複雑でした。

学徒動員で知覧町に行きました。軍馬が60頭いて、飼料を確保するために、外で草刈りをしました。米軍機が頭上を通り過ぎるたびに、急いで伏せました。機銃掃射を受けることもあり、米軍機が上空に戻っていくのを見て、ようやく身を起こしたものです。

私たちの班にいた陸軍少尉の「老兵が多く、すぐには伏せられない。お前たちが将来この国を守ってくれ」という言葉が、今でも忘れられません。

垂水大空襲—1945年8月5日

垂水市は空襲を受け、町は大きな被害を受けました。あの日のことは、今も鮮明に覚えています。朝、草取りをして、昼食に母が作ってくれたそうめんを食べている時に警戒警報が鳴りました。当面大丈夫だろうとそうめんをすすっているといきなり空襲警報のサイレンが鳴り、すぐにドカーンと爆弾が落ちて家がグラグラと揺れました。爆音と爆発音が続き、防空壕に8人が折り重なるように潜り込みました。やがてシャーシャーと焼夷弾が降り注ぐ音が聞こえ、隣の屋敷の竹藪が燃え上



川畑弘見さん（昭和5年生まれ）にお話をうかがいました

がりました。火の粉が降り注ぎ、着物を被りながら別の壕へと走りました。倉庫の火を消そうとしましたが、南の方から大火が迫ってきました。焼夷弾は1mから2mの間隔で落ち、あちこちに火柱が立ち上がりました。母や妹、弟は無事でしたが、飼っていた豚は焼け死んでしまいました。教科書も荷物も何もかも燃え尽き、町は焦土になりました。あの時の恐怖は「脳裏から一刻も離れたことはない」と言っても過言ではありません。戦争はあってはならない。体験は語り継いで残さねばならない。そう思います。

今、伝えたいこと

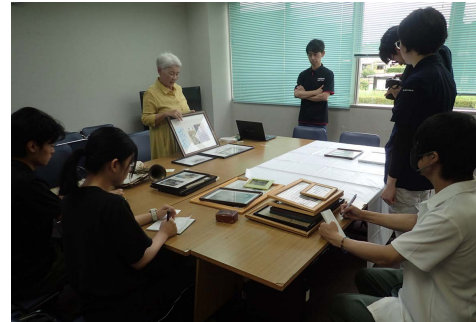
米軍機が見えるたび、憎たらしくてしょうがなかった。低空飛行のため操縦席と目が合うことがありました。パイロットは笑いながら、逃げ惑う住人を狙って撃ってきました。恐怖の中で感じたのは人の命の重さでした。今の人たちには、あの時の息づかいまでは伝わらないかもしれません。けれど、遠慮せずに、お年寄りに色々聞いてほしい。尋ねられれば私たちはきっと思い出します。語ることが、次の世代を生かす力になると信じています。

文献にみる第六垂水丸遭難事故

垂水市所蔵資料の目録を作成しました。第六垂水丸遭難事故に関する写真や文献記録が中心です。垂水の戦争を語る上で欠かせない出来事です。

第六垂水丸遭難事故 (参考：『垂水市史』下巻)

昭和19(1944)年2月6日に大隅半島と鹿児島を結ぶ唯一の交通機関である垂水丸が沈没した。死者547名で、日本海難事故史上2番目の規模である。当日は日曜で西部第18部隊(鹿児島市伊敷)の最後の面会日であり、いつ戦場につか分からない入営中の夫や息子に一目会いたいと思う家族が大隅半島の各地から垂水へ来て乗船した。定員をはるかに超えていたが、軍の意向で人員制限は考慮されず、上甲板まで客は一杯だった。垂水の栈橋を離れて100メートル位のところで方向を転じるとき、バランスを失って転覆した。



川崎アサコさんにお話をうかがいました
一人ひとりのエピソードが心に残りました

母の髪を両手で握りしめたまま亡くなった子、鹿屋から出撃する婚約者に会いにきた女性、死を覚悟して恥をさらさぬように着物の腰紐で膝を縛って亡くなった女性、多くの悲劇がありました。学校で流行る結膜炎治療のために鹿児島市内の眼科に行こうとした子どもたちは、乗船場所で生死が分かれましました。空の一升瓶を抱きしめて浮いて助かった男性がいます。浮き上がったところを助けられた生後50日の女性は、その後も泳げませんでした。娘の遺品をずっと開けられなかった父親もいます。生存者は罪悪感があり、事故が語られることは少なかったそうです。被害の全容は今も分かっていません。事故を記憶し続けるために、遺族の思いを受け継ぐために、残す必要のある資料です。

第六垂水丸遭難事故は、太平洋戦争中に多くの民間人が命を落とした出来事です。この事故で亡くなった方々も戦争の犠牲者に他なりません。こうした悲劇的な出来事がここ垂水の地で間違いなく起こったことを物語る遺影や遺品の数々は、私たちが未来へ伝え続けていかななくてはならない歴史そのものであると感じました。今回の経験を心に刻み、今後も戦争と向き合い続けます。

番号	資料名	種類
1	第六垂水丸の写真	写真(コピー)
2	九州一の戦前の垂水栈橋	写真(コピー)
3	遺品 昭和十九年二月六日 乗船券 遺品 昭和十九年二月六日 乗船券	現物 写真(コピー)
4	遺品 サンデー毎日社製小銭入 遺品 若鷺の歌 遺品 予科飛行練習生の歌 遺品 弟明夫さんの写真 遺品 父秀夫さんの写真 遺品 長男照志さんの写真	現物 現物 現物 写真 写真 写真(コピー)
5	遭難後の第六垂水丸就航前	写真(コピー)
6	昭和天皇鹿児島県行幸御乗船ボサド栈橋旧第六号 第一垂水丸改め昭和24年6月3日	写真(コピー)
7	田之上家写真	写真(コピー)
8	田之上実写真	写真(コピー)
9	一番若い乗船客 生後五十日の生還者 小学校時代	写真(コピー) 写真(コピー)
10	奇跡の再会 旅立った歴史の証人 再会写真 再会写真花束贈呈	新聞記事 新聞記事 写真 写真
11	初六年松組 同組から五人の遭難者	写真(コピー)
12	駆け込み最後の客 田中治子さん(本人写真) 遭難者 川井田トキさん 家族写真 トキさんの息子稔さんの短歌	写真(コピー) 写真(コピー) 写し
13	室屋新七さん 平成21年1月25日逝98才	写真(コピー)
14	娘のいない卒業式昭和十九年	写真(コピー)
15	田島和子童話集 貰いお殿様	書籍
16	鹿屋へ出撃する婚約者に会いに 鹿屋へ出撃する婚約者に会いに	写真(コピー) 手紙(コピー)
17	遺品 裁縫箱と着物の端切れ	現物
18	生後50日の生還者の家族写真	写真(コピー)
19	川上さん親子の写真	写真(コピー)
20	六日したら帰るよ	写真(コピー)
21	弟の霊慰碑に56年間参拝 宮田時哉さん家族写真 宮田時哉さん写真 宮田時哉さん兄弟写真 宮田時哉さん戒名	新聞記事 写真(コピー) 写真(コピー) 写真(コピー) 手紙(コピー)
22	祝出征川井田榮一君	現物
23	祈武運長久川井田榮一君	現物
24	ラッパ	現物
25	福島中佐探検軍歌	書籍
26	尋常小学讀本 八	書籍
27	尋常小学修身書	書籍
28	小学女子國語讀本卷六	書籍
29	新編修身教典 尋常小学校用 卷三	書籍

担当：平井優成(鹿児島大学法文学部人文学科多元地域文化コース2年)

石碑が語る垂水の戦争

垂水市内に残る石碑や慰霊碑を調査しました。サイズや形態の記録作成、写真撮影、三次元計測を実施し、石碑の現状を記録しました¹。

神貫神社の招魂墓・招魂碑（新城）

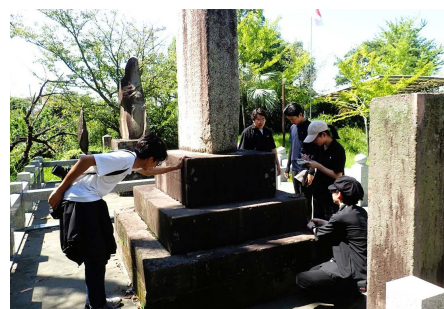
西南戦争や日清・日露戦争、太平洋戦争など、近代日本の戦争で亡くなった人々が祀られています。複数の時代の戦争に関わる慰霊碑が一か所に集められており、地域の人々が長い年月をかけて戦争の記憶を受け継いできたことが分かります。



神貫神社の石碑

鹿児島神社の招魂碑（南松原）

西南戦争や日清・日露戦争の戦没者が祀られており、当時の人々の思いを知る手がかりとなります。1945年の垂水大空襲で神社は全焼し、1965年に現在の社殿が建てられました。戦後に修復が行われた経緯もあり、戦争の記憶を後世に伝えようとする地域の思いが感じられます。



鹿児島神社の石碑

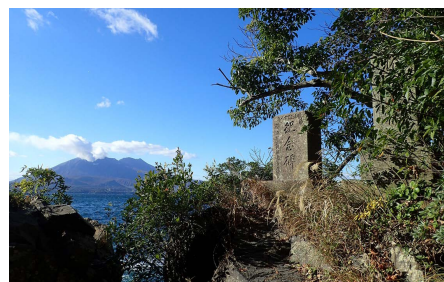
第六垂水丸遭難者慰霊之碑（旧垂水港）

1944年の第六垂水丸遭難事故で亡くなった人々を悼むために建てられました。目の前で起きた事故の衝撃の大きさを地元でも語られることが少なかったのですが、33年ぶりの慰霊祭（2009年）、慰霊碑の移設（2010年）など、事故のあった事実を後世に伝える新たな取り組みが始まっています。海とともに生きてきた垂水の歴史や、戦争が人々の暮らしに影響を与えたことを伝える存在です。



調査風景

他にも、牛根の太崎観音には日露戦争の招魂碑・記念碑、西宝寺には西南戦争の招魂碑および太平洋戦争の慰霊碑があります。



太崎観音

今回の調査を通して、垂水市内には近代の戦争に関わる多くの石碑が残っていることを知りました。また、慰霊碑は単なる石造物ではなく地域の歴史や人々の記憶を今に伝える大切な存在であることを改めて確認しました。戦争と平和について考える身近なきっかけとして、これらの石碑が次の世代へ大切に受け継がれていくことを願っています。

註1 各石碑の銘文は垂水市教育委員会1982『垂水市史料集（四）石塔編』に掲載されています。

垂水の戦跡調査を通して大学生が考えたこと

調査を通して戦争を考えることに難しさを感じながらも、戦争が間違いなくここ垂水で起こっていたことを実感し、また、戦争を自分事として考えていきたいと感じるようになった。聞き取り調査や実地踏査をする中で、自分が戦争について「わかった」と思っていることは「わかった気になっている」に過ぎないのではないかという思いが強くなってきた。20世紀に日本で起きていた戦争について、一部の映像や写真、小説、ドキュメンタリーから創られた断片的なイメージを重ねることしかできない自分に至らなさも感じた。当時の社会や生活を100%捉えることは不可能だとしても、地域という規模で戦争を見たり考えたりするには、もっと多くの知見を吸収していかなければならないと痛感した。また、戦争遺跡の保存をテーマに意見を交わし、自分の考えを見つめ直したことで、“今ここに戦跡がある”ことの価値を再認識した。そして、証言者としてのモノをどれだけ生かすことができるのかを私たちは問われているのだと考えさせられた。最後に、垂水の戦争について学び、また、郷土の歴史を風化させない・後世に確実に継承していくために熱心に取り組まれている史談会の方々の姿を見て、私の曾祖父母は戦争の時代をどう生きて、私の故郷はどのような戦争を経験したかについて強く関心を抱いた。歴史を残す・伝えることの意義の重みを目の当たりにし、私自身もいつまでも先人の努力を享受するばかりではなく、自分には何ができるかを考え、行動に移していこうとする気概を持たなくてはならないと思った。

今回の調査では、垂水の戦争遺跡の調査や資料整理などを行なったが、調査成果をまとめることによって垂水の歴史が地域住民に普及する第一歩になると感じた。合同調査・ワークショップを行なって、高校生にとって地域の歴史はあまり馴染みのないもののように感じた。垂水の戦争遺跡については、高校生に限らず大人にとっても馴染みのなさそうなものであるため、今回の活動が垂水の人々にとって、地域の歴史が周知されるきっかけになると感じた。今回の調査結果をまとめて市民に周知させることが、今後必要であると感じた。

今回、垂水の戦争遺跡について学ぶ機会をいただけて、大変勉強になりました。壕や聞き取り調査を経て当時の人々の暮らしや考えについて学びました。また、魚雷監視台場や震洋基地を見て、軍事施設の役割やその造りについて学びました。当時の聞き取り調査に協力してくださった川畑さん、丁寧に説明してくださった史談会の皆様、本当にありがとうございました。

今回の活動を通して、改めて大学生と高校生が交流する大切さというものを感じました。学会や仕事先でもそうなのですが、自分たちの世代はとかく「若い人」と言われがちで、自分たちが若者の文化や感性の中心にいるように思いがちでした。ただ高校生と交流してみて、例えば（戦争を伝えるために）「ゲームをつくる」「劇や映画をする」「動画配信」など、とても考えつかないような意見が普通に出てきて、驚きの連続でした。こういったフレッシュな知見を得られるという点においては、今後とも交流の機会が増えればよいと思います。

まず戦争とは何かを改めて考える機会が貴重であると感じられた。戦争について述べた文章を読むことはあっても、戦争とは何か、自分たちが何を用いて何ができるかを真剣に、しかも年齢や所属の異なる人を含めて複数人で考えることができ、今だから、垂水市だからこそできることがあると認識できてよかった。

資料館ないしは博物館の設置は必要だと思います。せっかく史料があるのなら温度管理が行き届いた施設で保存・展示するのが後世に垂水の歴史を伝える上で必要なことだと感じました。特に、垂水では第六垂水丸の転覆事故という垂水ならではの戦争に関する歴史があり、目撃された方が沢山いらっしやったらその方の証言とともに見せていただいた写真やのぼりを展示すると当時をイメージしやすいですし、史料を提供してくださった方も嬉しいと思います。また、壕や魚雷監視台場などの遺構については存在する場所やその説明を地域の方に分かっていたことが必要だと思います。最終日に見た塀の弾痕は一目見ただけではそれが弾痕だとは分かりません。一種の観光スポットのように立て看板を立てたり、人が行きやすいように環境を整えれば垂水の戦争について市民の方も興味を持ってくれるのではないかと思います。

戦争遺跡を実際に見ても、そうした遺跡が現役時代にどのように使用されていたのかをイメージするのが難しかったというのが私自身の正直な感想の一つだ。語らぬ遺跡に親近感を抱いてもらったり、効果的に学びを得てもらったりするためには、活用の場面で復元模型やジオラマ展示を導入して遺跡に動きを伴う表現や見せ方を実践するのが好ましいのではないかと考える。

未来につなぐ垂水の戦争の記録

令和7（2025）年は太平洋戦争終戦から80年を迎える節目です。あらゆる人が巻き込まれた戦争の痕跡は今も多様な形で各地に残っています。垂水市にも戦争遺跡や関連資料がありますが、調査研究や資料整理、保全、活用は十分ではなく、失われる寸前の危機的状況です。戦争体験者なき時代をこれから生きてゆく私たちは、戦争の何を、どのように継承したらよいのでしょうか。なぜ受け継ぐ必要があるのでしょうか。戦後80年を契機とした垂水市・垂水高等学校・鹿児島大学の連携事業を通して、垂水市の戦争や近現代に向き合い、これからの未来をともに考えました。

「戦争」というテーマは大きく複雑な問題です。本事業では複数手法（現地踏査、聞き取り調査、文献調査、測量調査、三次元計測、石碑等の記録調査）による総合調査を実施して記録を作成するとともに、対象や方法に応じて得ることのできる情報の違いも検討しました。そして、戦争の記憶や記録を残す意味や活用方法について議論しました。

調査には鹿児島大学法文学部人文学科考古学ゼミの学生が参加しました。考古学とは、過去との対話を通して、現在の世界が構築される過程を知り、未来を生きる方法を探る学問です。日常的な授業や活動で習得した考古学の知識・技能のフィールドでの実践や、地域に根差した活動をする文化財専門職員や史談会との出会いを通して、地域において文化遺産を守り伝える意味を深く考える機会になりました。垂水

高等学校の生徒と一緒に合同ワークショップで協働することでお互いに刺激を受けました。高校生は探究活動を通して垂水市の文化財や戦争への理解を深めることで、新たに気付いた地域の魅力を広く発信することを決めました。本事業で構築した基盤を踏まえて、連携事業に関わった人たちはそれぞれに垂水の地域資源に新たな価値を見出し、次の行動を始めています。活動を通して好きになった垂水が未来に続くことを願うからです。

戦争の記録を未来につなぐためには、戦後80年というタイミングだけではなく、今後も戦争について考える持続的な機会や場の創出が必要です。戦争は過去の話ではありません。平和は当たり前ではありません。資料を失うと、二度と取り戻すことはできません。戦争の事実をなかったことにしないためには、忘れないことが力になります。身近なところに残る戦争の痕跡に気付いて過去と向き合い自分ごととして考えること、多くの人と対話を重ね続けることがはじめの一步です。未来に向けて力強く踏み出すために、まずは足元の歴史を見つめ直しましょう。戦争が歴史になりつつある現在だからこそできることがあります。

もっと深掘り／垂水市の戦争を知る本

- 垂水市役所 1965『太平洋戦争のつめあと 垂水市戦災日記』
- 垂水市史編集委員会編 1978『垂水市史下巻』垂水市
- 垂水市史料編纂委員会編 1995『垂水市史料編（十三）戦後五十年戦争体験記』垂水市教育委員会

担当：石田智子（鹿児島大学法文学部人文学科准教授〔考古学〕）



身近なところに戦争の痕跡が残っています
地域の歴史を知り、大切にし、深く考える
まずはじめの一步を踏み出しましょう

本活動は、垂水市令和7年度包括連携文化財調査事業および鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター令和7年度地域マネジメント教育研究プロジェクト「垂水の戦争の記録と活用：地域社会との価値共創」（実施体制：石田智子・中嶋晋平・吉田明弘・高嶺光佑）で実施しました。活動の実施にあたっては、垂水市教育委員会社会教育課、鹿児島県立垂水高等学校、垂水史談会、道の駅たるみずはまびら、鹿児島大学農学部附属高隈演習林をはじめとする皆様に多大なるご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。戦争遺跡は崩落の危険がありますので、安全に十分ご注意ください。公開されていない戦争遺跡への立ち入りはお控えください。安全対策とマナーへのご協力をお願いいたします。

垂水戦跡調査隊

垂水市 × 垂水高等学校 × 鹿児島大学 2025 年度連携事業成果報告パンフレット

2026年2月8日 発行

編集：石田智子

発行：鹿児島大学法文学部

問い合わせ先：〒890-0065

鹿児島県鹿児島市郡元1-21-30 鹿児島大学法文学部人文学科